山口学芸研究 第16号 2025年 pp.98～107

人格形成の基礎となる幼児教育の在り方についての一考察
～就学前の読書体験に着目して～

村中李衣・相沢和恵*

A Study on the Role of Early Childhood Education in Personality Formation: Focusing on Pre-School Reading Experiences

Rie Muranaka・Kazue Aizawa

１．研究の背景

読書が子どもの健やかな発達に多大な影響を与えていることは言うまでもない。国立青少年教育振興機構の2021年の調査研究では、幼少期の読書活動が成人後の「共感力」や「自己肯定感」といった非認知能力に与える影響をまとめ、読書を通じて養われた「共感力」「思いやり」「想像力」が、その後の人格形成や社会性の向上に寄与すると実証的に示している。読書の効果としてアンドリュー（2013）は、語彙や語学力、学力、想像力と性格の発達、感性、社会性、精神衛生にもたらす影響など14項目を挙げ、そのエビデンス評価を行っている。また中根ら（2020）は、子どもに絵本を読み聞かせる親に着目し、親にとっても子どもと一緒に絵本を楽しんでいる感覚が大きな価値として認識されていると述べている。

一方雨越ら（2020）は、主に保育園での集団読み聞かせ場面における認知能力の向上を、言語性・視覚空間性ワーキングメモリー、短期記憶、語彙力の３項目の測定から確かめている。他にも嘉数ら（2004）のように、読書環境と心の理論課題（表情理解,誤信念課題など）の達成率の相関を確認したり、構造モデリングを用いて成人後の意識・意欲・行動に与える影響を確かめる濱田ら（2016）のような研究や、集団への絵本の読み聞かせの意義を現職の保育者からの調査より明らかにした青戸ら（2018）のような調査や研究も活発に行われている。

これらはいずれも、読書の効用を言語の発達と心の発達という２側面から捉えようとしていることに変わりはない。

さて、村中ら（2022）は、F.C.バートレットのスキーマ理論に基づき、保育を志す学生を対象に子ども時代の記憶を「ものがたり」として書き出し、それらが、子ども時代のどんな身体装置によって記憶保存されるのかを分析検討することにより、実際の保育場面での子ども理解に役立てる方向を模索してきた。その結果、多くの学生が自身の体験を自分が何者であるかという主我構築の手掛かりとして物語る様が浮かび上がった。本研究では、幼児期の体験の中で特に「読書」という行為に焦点を絞り、園や家庭で行われてきた読み聞かせあるいは、ひとり読みが、10年以上を隔てどのように物語られるかを明らかにしていこうとする。そこには、これまでの読書活動に関する研究で見落とされてきたもの、つまり、「どういう効果があったか」を測定する直接的な指標として言語の発達や心の発達を扱うのではなく、各自の心の中でどう熟成し、それが自己

*元浦和大学

を形成していく過程の中でどう位置付けられているのかを見ていくものである。

また本研究では、読書環境としての「園」と「家庭」の役割が、これまで暗黙のうちに二分化されて扱われていることへの問題提起をも試みようとしている。先に挙げたいくつかの論文においても「園での調査」「家庭での調査」は、抽出する目標も含めて最初から分けて考えられている。園における読書指導の目的と家庭でのそれは異なることが大前提であるかのように扱われているのだが、それでよいのか。多様な家庭環境を背景にして生きる子どもたちにとって、園での読書活動が果たす役割をさらに柔軟に考える時期に来ているのではないだろうか。今回の調査では、大学生を対象に、どこで誰と読んだ絵本や読み物が一番心に残っているか、エピソードを含め具体的に語りだしてもらうこととし、その回答の中から園での読書活動と家庭での読書活動、それぞれの新しい役割や可能性を模索していく。

２．方法

児童文学の授業をこれから受講しようとする大学生全員に、就学前の読書体験に関するアンケート実施の趣旨を伝え、その場で回答してもらった。回答は任意であること、匿名性を守秘することを口頭及び紙面で確認したのちに実施した。

実 施 日：2024年４月10日

実施場所：岡山県N大学内教室

質問内容：以下の質問に対して自由記述を求めた。

「小学校に上がる前に読んだり聴いたりした絵本や読みものの本の中で、一番印象に残っている本の名前とその本に関わるエピソードを具体的に教えてください。誰とどんな場所で読んだのか、あるいは、ひとりで読んだのかも、覚えている限り書いてください。」

３．結果

回答者154名（有効回答数154）。このうち、家庭で読んでもらった本について回答したものが116名、園で読んでもらった本について回答したものが30名だった。それぞれの回答の中には、両方で読んでもらったと回答している者１名のエピソードも含まれている。また、それ以外の場所での出会いを記したものが、３名いた。以下は、全ての回答者の思い出に残る１冊の絵本及び読み物についてのエピソードを８つのカテゴリーに分類し、それぞれ、園での読書と家庭での読書場面に分けてまとめたものである。今回は、家庭と園での記憶以外を記した３名のエピソードについては、分析から除外した。また、ひとりの回答者が思い出に残る同じ１冊の本について、園での思い出と家庭での思い出の両方について回答している場合はその両方をカウントし、またひとりが複数のカテゴリーについて記したものは、それぞれのカテゴリーごとにエピソードを記入している。結果、今回分析の対象として扱うエピソード事例数は、家庭137例、園40例となった。以下がカテゴリー別に事例をまとめたものである。回答者の表現をそのまま用いることを原則としている。意味が判然としない表現について前後の脈絡から明らかに推測できるものについては、カッコをつけて、ことばを補足した。

１）家庭で読んでもらった絵本のかかわりの思い出

①声の記憶　23例

・祖母の優しい声の記憶/繰り返し読んでくれた父の声の記憶/母のほほえみと一緒に語られたこと/厳しい祖父が読んでくれた声の記憶/ジェスチャー付きの母の声/姉がゆっくり読んでくれた（声）/父のとてもリアルな声と語りが怖かった/学校の先生だった母の読みの声は上手だった/祖母が語ってくれた（声が）印象的で、祖父と祖母と三人の幸せな記憶/忙しい母に代わり兄が読

んでくれた声の記憶/母の安心感のある声/「おしまい」とゆっくり絵本を閉じる母の声や姿が好きだった/父をはさんで妹と二人で覗き込んで聴いたが、父の声が特徴的で笑った記憶/母の読みが上手で繰り返しのリズムが楽しめた/母の読みが落ち着いていて心地よかった/母が感情をこめて振りもつけて読んでくれた声の記憶/姉と妹と川の字になって母の語る声を聴いた/毎晩優しい声で読んでくれた母に感謝/「どのパン食べたい？」という母の問いかけの声/母の声が優しくて上手だった/ぷつぷつ、じゅぅーというおいしそうな音の記憶/ぽたあん、ぷつぷつ、と言った母が繰り出す（声の）表現のおもしろさ/ひとり親家庭で寂しかったが、母親が明るい声で何度も読んでくれた思い出/繰り返し読んでくれた祖父の声

②贈与の記憶 14例
・父がサプライズで買ってくれた/大好きな祖母が買ってくれた/祖母からの誕生日プレゼント/母が時計を読めるように買ってくれた/トマトが嫌いな私のために母が選んでくれた/父が買ってくれた/せなけいこの展覧会に行って母が買ってくれた/父親が著者だったのでストーリーがよかったからというような理由ではなく何度も読んだ/祖母が箱入りセットで買ってくれた。本の内容より本の存在自体が祖母の愛と絡まり宝物になった/母が好きで全シリーズ家にある/絵本の定期便だった/ ２冊セットで買ってもらった/祖母が語ってくれた大事な思い出/叔母にプレゼントしてもらった

③人によって刺激された身体や五感の記憶　７例
・祖母に読みながら頭をなでてもらった/母が読みながら手をつないでくれた/母の膝の上で幸せだった/母と二人でいる時間が特別/母子家庭だったので、布団の中で母と一緒に過ごすあたたかさ/読んでいるあいだ、母が怒らずハグしてくれた/祖母の膝の上で、家族・叔母・祖母とみんなで読んで幸せだった

④読むことで生まれた遊びやアクティビティ　16例
・読んだ後、実際に妹と観察/読んだ後母とおひさまパンを創った/妹の入院で祖母の家に預けられ寂しい思いを慰めてくれ、妹の退院後いっしょに絵本の中の楽器を創った/父が絵本に出てくる「虹の指輪」を連想する大きなハートのついた指輪をくれた/母に怪獣の着ぐるみを創ってもらって「がお～っ」と、かいじゅうごっこを父母と一緒に楽しんだ/布団の中で父と再現して遊んだ/父親と～派？と言い合って盛り上がった/母と「きょうは何の日？」「たんじょうび！」と語り合った/ぬいぐるみ３体と妹と母といっしょに並んでごっこ遊びをしながら楽しんだ/読んだ後母がたくさんのてんぷらをつくってくれた/祖母が絵本に出てきた主人公のぬいぐるみを作ってくれた/母と読んだ後かくれんぼをして遊んだ/読後家族みんなで眠ることで、物語の怖さを克服/ホットケーキをいっしょにつくって食べた/日曜日、母とホットケーキを作って食べた/土を掘って中を見た/家で花火のシーンを再現し、母に怒られた

⑤誰とどんなふうに読んだか・誰に読んだか・誰に読んでもらったかの記憶　27例
・姉妹で読んだ記憶/弟やいとこに読んであげた記憶/姉の本だったのに勝手に読んでケンカになった/家族全員で楽しんだ/妹に読んであげると「てんぷらがたべたい」と母にリクエストした/弟の面倒を見ながら読み聞かせた/妹にも読んであげると笑ってくれた/姉とけんかしていたのに、それを忘れ本について語り合った/祖母と弟と３人で、読んでもらったあと、ホットケーキを焼いた/読んでもらったことで初めてお菓子を作った/いつもは自分たちで絵本を選んでいたが初めて母が選んだ絵本で、いつもより絵本の時間が長く楽しかった/かぼちゃ料理を食べる真似

をして楽しかった/父が歌を一緒に歌いながら読んでくれた幸せ/母と心配し合いながら一緒に読んだ記憶/母が主人公の名前を自分の名前に変えて読んでくれた/母と内容の面白さを共有しながら読んだ/母と好きな本を共有できるうれしさ/母と歌いながら読んだ/祖母にいろいろ質問し、祖母とやり取りできたのが嬉しかった/ ５歳年上の姉が真剣に読んでくれた/祖父母と兄と楽しくおしゃべりしながら読んだ/兄と交互に「いないいないばあ」と言って笑い合った記憶/弟と何度も声に出して読んで楽しんだ/ぼろぼろになるまで読んで楽しんだ/母と姉妹と一緒に読んでいたのだが、そばで父親が嬉しそうに見ていたのが記憶に残っている/中学生になって母と振り返り楽しかった/母の読みが上手で、母といっしょにいる時間そのものが楽しかった

⑥読み終えてからの記憶　10例
・夜中にふと起きたとき親がいない状況が同じだったので、母がこんな風に迎えに来てくれないかなぁと思った/布団の中で兄とどちらが遅くまで起きていられるか競争になった/自分は怖かったのに弟は楽しそうで負けたような気持になった/この絵本が気に入ってどこへ行くのも持ち歩いた/本を読んでもらってはじめて泣いた/「こんなに大きい本読めたね」と母親に褒めてもらい嬉しかった/ねずみくんみたいに「貸して」と言われたら貸してあげられるといいねと母と話した/我が家は離婚していて、絵本の中の父親とのやり取りがうらやましかったし、ベイビーちゃんのようにわがままがしてみたかった/黒い色が好きになった/姉とけんかをしていたのだが、読み終えて仲直りした

⑦独りとの付き合い方を知る　７例
・親が厳しかったのでひとりで読む方が自分の想像の世界が広がり夢中になった/家の絵本コーナーで一人で読んだ思い出/家のリビングを秘密基地に見立ててひとりで幸せを味わった/母が読んでいる途中で号泣してしまい最後まで読めなかったので自分で読んだ記憶/一人で読めるようになり、自立を促してくれた/絵本は苦手だったが、短くて一人で読みやすかったので、小学生までお気に入りだった/両親が離婚していたのでひとりで眠れない夜、ぬいぐるみといっしょに、繰り返し読んでもらった

⑧物語から得た感情や学び　33例
・コツコツ頑張り続けることの大切さを学んだ/母と妹が玄関で待ってくれるラストシーンの姿に心が温まった/頑張ったら褒めてもらえて「ありがとう」って言ってもらえるんだな/自分もおつかいに行ってみたい/牛乳が無性に飲みたくなった/ベッドが気持ちよさそうだなぁ /絵のタッチは怖いけどお話は面白くて笑い転げた/動物とのコミュニケーションとファンタジーな世界観に惹かれた/いろんな動物が出てきて飽きなかった/戦争では動物も死ぬ。つらい。ケンカは戦争は嫌だ/カラフルな色とパレットの茶色が印象的/動物たちが互いを思いやる気持ちが素敵だなぁ/一人で読めるようになり自立を促してくれた/繰り返されるフレーズがストーリーより気になった/絵が細かくて発見があり面白かった/イラストがかわいかった/押し入れ怖い、早く寝よう/表紙の魚の鱗がキラキラしてた/ワクワクして絵本の登場人物と一緒に冒険気分だった/表紙が茶色で分厚くて高級そうだなぁ /お菓子の家がおいしそうだなぁ /魔女はこわいけど、お菓子の家はうらやましい/手袋の中に入ったような気持ち/卵を落とすところが好き/表紙の絵が印象的だった/縦型が印象的でキャラクターがかわいかった/飛んでいくときの輝きが印象的/色の鮮やかさ/食べ物のインパクト/引っ越しで友達がいない寂しさ、主人公に共感し勇気をもらった/イラストがかわいかった/色遣いが不思議だった/穴が見ても触っても楽しかった

２）園で読んでもらった絵本のかかわりの思い出

①声の記憶　２例

・先生の読み方がやさしかった/ボランティアの人が登場人物によって読むスピードや口調を変えてくれて楽しかった

②贈与の記憶　６例

・自分の名前が主人公の絵本だというのでプレゼントされた/誕生日のプレゼント/誕生日に自分の名前入りでプレゼントされた/幼稚園で劇をするので、母が本を買って読んでくれた/保育園の先生が新しい本として読んでくれた/保育園の先生が新しい本として読んでくれ、わくわくした

③人によって刺激された身体や五感の記憶　該当なし

④読むことで生まれた遊びやアクティビティ（発表会・劇遊びを含む）　６例

・劇で犬役をした思い出/発表会でどろぼうの役をした思い出/年長さんの劇でライオン役をやった/発表会でケーキを食べる役を勝ち取った/読んでもらったあと、人形劇で観てより一層怖くトラウマになった/卒園制作で、ジオラマを創った

⑤誰とどんなふうに読んだか・誰に読んだか・誰に読んでもらったかの記憶　該当なし

⑥読み終えてからの記憶　４例

・午睡の前の読み聞かせだったのですぐに眠りについた/お昼寝の前に読んでもらったので、こわくてそのあと、眠れなかった/クラスにいつも一人ぼっちの子がいたのを意識するようになった/読んだ後、たくさんの動物クイズをしてもらった

⑦独りとの付き合い方を知る　５例

・ともだちとふたりだけの空間に浸れた/母親のお迎えを待つ時間に一人で読んだ記憶/一人で静かに読むのが好きでバムケロと秘密基地を共有しているような気持ちになれた/延長保育の時、ぐりとぐらはふたりだけど、私はひとりで。やっぱりさみしいなぁ。でも、ふたりなかよしのものがたりをみているうちに、気持ちが少し和らいだ/延長保育の時長い本を一人で読めた達成感

⑧物語から得た感情や学び　17例

・食べ物がおいしそうだった/動物がたくさん出てきて面白かった/カステラがとてもおいしそうだった/赤と青が印象的/ぐりとぐらの歌が印象的/白いカラスの子が好き/かわいいイラストでパンがおいしそう/協力の大切さを学んだ/人間でなくいろんな動物が助けに来るけど、なんで動物なのかなぁ /黒っぽくてこわいなぁ /ねずみばあさんこわい/押し入れ怖い・早く寝よう/先生や母親といっぱい話すきっかけになった/現実と非現実の世界の行き来、自分の内がわにもあるなぁ /絵が怖い/穴から指が出る仕掛けが面白い/ブランコに乗りたいなぁ

以上、読みに関するエピソードの回答を家庭と園それぞれに８つのカテゴリーに分類すると、最も多かったのは、家庭でも園でもカテゴリー⑧「物語の内容から得た感情や学び」（家庭33例・園17例）であった。

しかしながら、家庭での読みのエピソードを細かく見ていくと、カテゴリー①「声の記憶」（23例）、⑤「誰とどんなふうに読んだか・誰に読んだか・誰に読んでもらったかの記憶」（27例）、

②「贈与の記憶」(14例)、③「人によって刺激された身体や五感の記憶」(７例)、というように、本を介した家族との触れ合いが最も心に残っているという回答が、合計すると本の内容に関する記憶よりもはるかに多かった。さらに、カテゴリー④「読むことで生まれた遊びやアクティビティ」(16例)や、⑥「読み終えてからの記憶」(10例)も、そのほとんどが、家族との触れ合いの中で生まれたエピソードであった。

一方、園での読みに関するエピソードについては、その総回答数が、家庭での読みよりも少ないことを前提としてではあるが、本を介した人とのふれあいについて回答していたものは①「声の記憶」(２例)、②「贈与の記憶」(６例) しかなかった。また、園での読みにおいては④「読むことで生まれたアクティビティ（発表会・劇遊び)」(６例)、⑥「読み終えてからの記憶」(４例)は、家庭での記憶と異なり、人との触れ合いの記憶ではなく、園での生活の流れの中に組み込まれた記憶であった。またこれらの回答と一線を画した特筆すべき記憶として、家庭においても園においても⑦「独りとの付き合い方を知る」経験となったと回答している者が一定数（家庭７例、園５例）存在したという事実である。これらの結果をもとに考察を進めていくことにする。

４．考察

１）声の記憶の重要性

親子のスキンシップや「声」の記憶が子どもの情緒的発達に重要であることはBus et al.（1995）等で既に言われてきていることであるが、今回の読書に関する調査においても、作品の主題以上に語り手の声によって記憶が保持されていることが、まず注目に値する事項であった。家庭での読み聞かせが子どもの心理的安定や愛着形成に及ぼす影響の大きさは、齋藤ら(2022）を始め、育児に関するあらゆるメディアが伝えてきていることである。例えば、「クーヨン[註1]」2024年11月号は「自力で生きるための読書」という特集を組んでいるし、講談社「えほん通信[註2]」ウェブサイト（2024）では「脳科学で証明。子どもの心を育てる『読み聞かせ』の力」という特集を組んでいる。しかしながら、園での読み聞かせにおいても、いつもとは異なる先生の声、指導統率の声とは異なる「ものがたりの中にいっしょに浸る声」に触れる経験も非常に重要なのではないか。「先生の声が優しかった」という記憶がいちばんに残っているという回答が、数は少ないが存在したことは見逃せない。村中（2013）は、これまで自らの実践の中から、読み聞かせ場面における「声」や「語り方」が、子どもと大人の心をつなぐ役割を果たし、心地よさや安心感を与えるという視点から「マニュアル通りではなく、自分に似合う声で読みあうことが大切」と強調しており、絵本の読み手が自分らしい声を届けることで、子どもの情緒的な安定や成長を支えると指摘している。本調査で示された家庭での読みの記憶に残されていた「母の声の安心感」や「祖父母の読み聞かせの記憶」など、声や仕草が記憶に残るエピソードは、村中の提唱する「絵本を介した非言語的コミュニケーション」の実践的な証拠ともいえる。

２）身体を通した作品の感受

「声の記憶」と共に、家庭での読書場面における「身体的な触れ合い」など五感を通じた体験が、子どもにとって15年以上を隔てても幸福感を伴い具体的な記憶として残っているものが非常に多かった。特に「おしまい、と絵本を閉じる姿」「母の問いかけ」など、読み手の仕草や声のトーンが印象に残るという結果は、従来の「読み聞かせの質」研究に対し、読み手の表現や細かな動作も子どもの記憶や心の発達に長く影響することを示唆している。

夜寝る前や午睡前に読みあった記憶も、多く挙げられた。聞き手が読み手の声を聴くだけでなく、「親子で川の字になって互いの身体を感じ合い、母の声を聴きながら眠りにつく」「毎晩読んでくれた母親への感謝の気持ち」「布団の中で親や祖父母と共に過ごす温かさと安心感」「おまじ

ないや歌の節を繰り返し聞くわくわくした気持ち」「読みあいを終えた後、すぐに眠りにつけた」「（ストーリーによっては）怖くて眠れなかった」「寝る前の（読みあいの）そのひと時が一番の楽しみだった」等の学生の記憶からは、子ども時代の入眠前のひと時が、五感を通して確かな記憶として残っていることを表している。

本調査における「親子や祖父母とのスキンシップ」「家族と一緒に読んだ時間の幸せな記憶」など、読書を通じて関係性が深まったエピソードは、村中・相沢が提唱する「読みあいによって育くまれる絆づくり」の大切さを裏付けている。この事実は、園での読み聞かせの際にも保育者が作品のテーマや内容にだけ頼るのでなく、保育者自身が全人的に読みの場と関わることの可能性をも示唆しているのではないか。残念ながら、今回の調査回答の中には、そういった園での記憶が残されている例は確認できなかった。ヴィゴツキーの社会文化的発達理論を持ち出すまでもなく、視覚・聴覚・触覚などの五感の刺激が記憶の定着に寄与することを考えると、園においても絵本や読み物を楽しむ時間には、個々の子どもたちが「おとなしく先生の読んでくれるお話を聴く」というような受け身の姿勢だけでなく、各自の身体性を発揮して物語世界に自由に浸りつくす経験を子ども達と保育者が共につくりあえることが望ましいのではないか。

高井ら（2022）の「絵本の読み聞かせプログラムの効果」研究や、「my-best[註3]」（2025）「寝かしつけ絵本のおすすめベストランキング」のように子どもを眠りに誘うための有益な読み方や絵本リストは、いろいろな形で提唱されている。こうした提唱が現場で重宝される中、聞き手の子どもは上述の通り、親や祖父母と身体を通して作品を感受している事実を鑑みると、却って読み手や聞き手の自由な入眠前のひと時を阻害してしまうのではないか、という危惧の念も抱く。

３）遊びや活動への発展

本調査では、家庭での読みにおいては「読んだ後にホットケーキを作る」「ごっこ遊びをする」など、子ども自身が絵本の内容を実生活や遊びに発展させている体験が記憶に残っている例が少なくなかった。これは、読書という行為を「受動的な体験」ではなく、「能動的な体験」へとつなげる教育的効果があることを示しており、家庭での遊び・創作活動と連動させた絵本の活用が注目されるところである。一方、園での読みの記憶が園でのそれ以外の活動と連動した記憶は「劇遊び」や「発表会の記憶」に限られており、子ども自らの自主的な遊びに発展した記憶は見受けられなかった。この背景には、ほとんどの園で、絵本の役割と言えば子ども同士のコミュニケーションや社会性を育んだり、「発表会」や「劇遊び」など集団活動や遊びに連動して社会性や役割意識の発達に寄与することを中心的ねらいとしているためではないか。これに連動し適した選書が求められたりもする。例えば安藤ら（2023）は、身近な教材の一つ「絵本」に着目し、研究対象の学生達が選んだ表現遊びに適していると思われる絵本をジャンル別に一覧表とし、絵本を基にした活動は子どもの想像力や協働性を高める可能性がある、と結論付けている。しかし、これが園や集団で絵本を読み聞かせる場の主たる目的へと傾斜していき、絵本が「遊びの導入」として教材化してしまう恐れもあることにも注意しなければならない。

そのような中で、寺村ら（1997）（1998）（1999）は、物語絵本を使った園での導入と展開の実践の中から、作品のあらすじや主題の読み取りだけでなく、子どもひとりひとりが、自分自身の感性で受けとめたメッセージやふくらませた想像力を用いてその後の遊びや活動に発展させていくことを重視している。浅木（2023）も、絵本を用いた遊びや表現活動は保育者と子ども達との心のつながりを深め、子どもの成長に大きく影響するとしている。筆者のひとり相沢（2024）も、幼年童話の読みあいから始まった５歳児クラスの人形劇遊びと、これらが発展した子ども会での発表とその後の実践事例を挙げ・厚紙や空き箱、段ボール等を使って人形を作る・人形に気持ちを託し役になりきってやり取りを楽しむ・基のお話からさらに想像してお話を作り足す・音響係

りやナレーション役も子ども同士で分担する・お客様を招いて子ども会で人形劇として上演する・上演後、楽しかった思い出を絵に描き壁面に飾る等の活動を、子ども達自身が主体的に活き活きと取り組んだ姿を紹介している。

しかし多くの園においては、先述の通り、「遊び」あるいは「表現活動」が、保育者側の意図によって絵本の読み聞かせからの発展として計画され、子どもの内側から生まれる物語の発展とは言い難い場合が往々にして存在している。寺村らも「絵本を読めば必ず遊びが生まれ、広がっていくわけではない」と指摘している。ここが、同じ「遊びや活動への発展」といえど、家庭での読書とは異なるところであろう。２）で述べた課題と共に今後、園で取り組んでいくべき読書活動の課題であると考える。

４）ものがたり世界との一人の対話

独りの時間を「ものがたりとの対話」によって過ごすことができたことを、一番の思い出に挙げているものが、家庭での読書、園での読書共に一定数いたことが非常に重要であると考える。「みんなでなかよく」ということが当然のように考えられ、「読み聞かせ」という言葉が読書活動の一つとして用いられるとき、大人対子どもたちという関係が前提となっている場合がほとんどである。その枠から外れ、ひっそりと一人で読書に浸った経験が子どもの心に残されていくことが明らかになった今回の調査の意義は大きい。読書は本来大人の側が「読ませる」ものでなく、子どもと本との静かな対話の時間でもある。それぞれの回答を読むと、そのきっかけは、自分だけが取り残されているというようなさみしさの感情が引き金であることが多かったが、そのさみしさを共有してくれた本との時間が、却ってかけがえのない時間として大きくなるまで心の支えになる場合もあるということであろう。村中ら（2022）は、大人の意図から放たれ自由にものがたり世界に触れることで、子どもは自分の経験や感情を重ね合わせ、自己理解を深めるプロセスに立ちあっているのだと、保育の実例の中から述べている。本調査におけるカテゴリー⑧「物語から得た感情や学び」も、子どもの傍らにいる大人の思惑から放たれ、子ども一人ひとりのこころの奥深くをかいくぐってこそ、自己理解や感情教育の効果に通じるものであり、読書が人格形成に深く関わることができるのではないか。

５．今後の研究の課題と展望

これまでの多くの研究は「読み聞かせの効果」と標榜したうえで「非認知能力の発達」を観念的に唱えるものが多かったが、今回の調査から、五感を伴う体験や非言語的要素（仕草や声）、遊びへの発展の記憶などが、その本を読んだ体験から15年以上の時を隔て、具体的な言葉として浮かび上がり、子どもの人格形成における重要な視点として注目された。その中で最も注目すべき点は、以下のことであろう。

園での読書体験と家庭での読書体験の記憶が、質的に異なっていたということ。これをそれぞれの役割が違うと割り切り、それぞれの現場で体験型読書の実践や読み聞かせの質的工夫を検討するという方向へ研究を進めていくことで果たして良いのか、園や集団的読みの場においても、家庭で感受されたような五感を伴う記憶を残せるような取り組みを模索する必要はないのか、という問題である。

この問題を追及していくために、本調査の継続研究として、就学後の子どもと保護者それぞれに今回のアンケート調査と同様の内容で追加アンケートを実施するとともに、発展的研究として、いくつかの園や家庭でのさらに具体的な読書活動の取り組みをインタビュー形式で実施していく予定である。

参考文献

相沢和恵（2024）「第9章　子どもと紙芝居、人形劇、パネルシアター」（宮野周/編著『子どもの文化―理論と実践から学び、考えよう』 教育情報出版所収）pp.104-105

安藤千秋・辰巳裕子（2023）「絵本から表現遊びへ展開するアイデア検討」香川短期大学紀要第51巻　pp.83-100

雨越康子・森下正修（2020）「幼児期の集団および家庭における絵本の読み聞かせと認知能力」日本教育工学会論文誌　43（４） pp.339-350

アンドリュー・デュアー（2013）「読書が子どもの発達に及ぼす影響」 東海学院大学紀要７ pp.261-267

青戸泰子・田邊資章・原田夏帆（2018）「保育・教育現場における絵本の読み聞かせの意義」 関東学院大学人間環境学会紀要　30　 pp.39-46

浅木尚美（2023）『絵本力―SNS時代の子育てと保育』ミネルヴァ書房

Bus, A. G., van Jitender, M. H., & Pellegrini, A. D. (1995). Joint Book Reading Makes for Success in Learning to Read: A Meta-Analysis on Intergenerational Transmission of Literacy. Review of Educational Research, 65（１） pp.1-21

F.C.バートレット（1983）宇津木保・辻正三訳『想起の心理学－実験的社旗的心理学における一考察』 誠信書房

濱田秀行・秋田喜代美・藤森裕治・八木雄一郎（2016）「子どもの頃の読書が成人の意識・意欲・行動に与える影響：世代間差に注目して」 読書科学，日本読書学会　58（１） pp.29-39

嘉数朝子・池田尚子・友利久子・識名真紀子・島袋恒男・石橋由美（2004）「家庭での読書環境が心の理論の発達に及ぼす効果」 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要６　pp.87-97

村中李衣（2013）「声をつくる物語・声がつくる物語に寄り添う―いくつかの読みあいを通して」こどもの文化　45巻１号　子どもの文化研究所　pp.19-25

村中李衣・相沢和恵（2022）「自己理解の手掛かりとしての『自分ものがたり』」ノートルダム清心女子大学紀要　Vol.46　N0.1　pp.110-128

村中李衣・相沢和恵（2023）『立ちあう保育』ミズノ兎ブックス

中根愛・中谷桃子・小林哲生（2020）「子どもに対する絵本読み聞かせから親は何を得るのか」認知科学,日本認知科学会　第27巻２号　pp.138-149

齋藤有・石川由美子（2022）「乳幼児期の家庭における絵本体験の実際と保護者の絵本読みに対する意識―『読み合い遊び』実践地域の保育園児家庭を対象に」宇都宮大学共同教育学部研究紀要　72　pp.82-99

高井直美・薦田未央・伊藤一美・塘利枝子（2022）「幼児の家庭における絵本の読み聞かせプログラムの効果」保育学研究　第60巻第3号　pp.11-22

寺村輝夫・渡辺めぐみ（1997）「保育現場における絵本の役割（その１）」文京女子大学研究紀要創刊号　pp.79-87

寺村輝夫・渡辺めぐみ（1998）「保育現場における絵本の役割（その２）」文京女子大学研究紀要第２号　pp.71-80

寺村輝夫・渡辺めぐみ（1999）「保育現場における絵本の役割（その３）」文京女子大学研究紀要第１巻第１号　pp.113-127

ヴィゴツキー（2005）　柴田義松監修　『文化的－歴史的精神発達の理論』学文社

註１　月刊クーヨン　クレヨンハウス

註２　講談社絵本通信　講談社絵本編集部公式サイト（情報取得　2025/ １/ ９）
https://cocreco.kodansha.co.jp/ehon/search?q

註３　my-best 絵本おすすめ（2025）　my-best.com（情報取得　2025/ １/ ９）
https://my-best.com/search_contents?q